



～人が集まらない今の時代に、もう一度「集まる理由」をつくった報告書～

第一章

栄光__かつて三重には、誇りがあった

第二章

衰退__静かに、確実に

第三章

試練__それでも火は絶えなかった

第四章

決断__背中を押した言葉

第五章

火を灯す者__総大将の心は熱かった！

第六章

継承__覚悟の夜

第七章

数字の戦場__三大天との戦い

第八章

総力戦、次世代研究会 in 三重__合従軍、動く

第九章

証明__復活は“人”だった、数字では測れない、本当の成果

最終章

未来へ__令和の三重県板青年部

第一章

栄光——かつて三重には、誇りがあった

「今日の会議、終わったら飯どうする？」

「次の旅行、どこ行くんやった？」

2010 年頃、三重県板青年部には、30 人を超える仲間がいた。

会議はいつもほぼ満席、建築板金 PR 行事では胸を張り「俺らが三重の板金屋や」という誇らしい姿があった。

それが当たり前で、それが誇りだった。

親会からの助成金にも恵まれ、金の心配より、「次は何をやる？」という話の方が多かった。

—この頃の青年部は、強く、明るく、迷いなく前を向いていた。



第二章

衰退 —— 静かに、確実に

2017 年頃になると少しずつ、違和感が広がり始める。

「今日、何人来るんやろ……」

理由は分からない。ただ、人が来ない。

10 人だった会議が、7 人になり、5 人になり、気がつけば、3 人か 4 人。

「忙しいだけやろ」そう言い聞かせながらも、誰もが心の奥で感じていた。

—このままでは、続かない。

第三章

試練 —— それでも灯は消えなかった

そんな状況に追い打ちをかけるように 2020 年、コロナ禍がやって来てしまう。

会議はリモートになり、集まること自体が難しくなった。画面越しの会議で、誰かがぽつりと言う。「……これ、いつまで続くんやろな」

コロナを機に退部する部員もいた。だが、残った者たちは、画面越しでも声をかけ合った。「元気か?」「仕事どうや?」

—完全には、終わっていなかった。

小さくても、確かな火は、絶える事なくまだ残っていた。



第四章

決断 —— 背中を押した言葉

【別紙①】

2022 年、桑原さんに次世代を三重で開催しないか？。そんな話が舞い込む。

「今の三重で？」 「北海道の次の年はきついなあ。」 「正直、厳しいな……」
空港も無い。新幹線の駅すら無い。部員も少ない。

ないことだらけの三重の現実は、あまりにも重かった —— 。

桑原さんは、一度この話を見送る判断をする。

だが、先輩の一言が、胸から離れなかった。

「やりたいと思うなら、やった方がいい」

岡本部長に相談した時、返ってきたのは、即答だった。

「やりましょう！」 「なんとかなるはずです！」

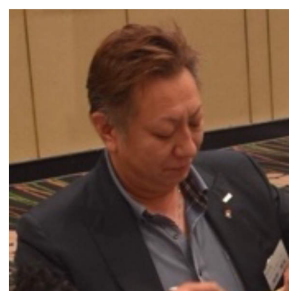
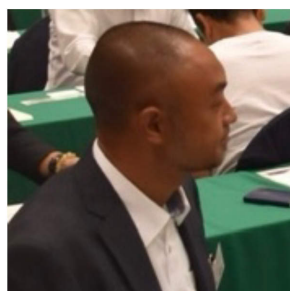
その瞬間桑原さんは、一度は開催を断った自分を恥じたという。

それほどに岡本さんの一言は力強かった。

—やらなければ、何も始まらない。

—やめなければ、何かが変わる。

三重県板青年部は、戦場に立つことを決めた。



第五章

火を灯す者 —— 総大将の心は熱かった！

2023 年 12 月、岡本さんの心は熱かった！

誰よりも先に、動いた。次世代の事業資金・準備金として青年部 50 周年式典の積立金、約 60 万円を借り入れ、都ホテルに打ち合わせに向かった。

次に名簿を開き、一本、また一本と電話をかける。

「久しぶりやな」「元気しとるか？」「顔だけでもええから来てくれへん？」

持ち前の明るさと情熱で、部員の凍りついていた心に火を灯していった。

そして、岡本さんは言った。

「会議は居酒屋でやろう！」

グラスの音、笑い声。冗談混じりの明るい声が飛び交う。

「金色ジャンパー作ろうや！」「次世代やし派手に行こ！」

「西野カナ呼べるんちゃう？」「吉田沙保里ならワンチャンある！」

一かつての三重県板が、確かに戻り始めていた。

だが、現実は厳しい。人が集まれば、支出も増える。帳簿の数字は正直だった。



第六章

継承 —— 覚悟の夜

2025 年 3 月、奥井が新部長に就任し、岡本実行委員長は総大将として前線に立つ。

ある日、岡本さんから奥井に電話が入る。

「次世代の会計やってくれへんかな？」

岡本さんにそう言われて、奥井は戸惑いながら答えた。

「……僕が会計でいいんですか？」

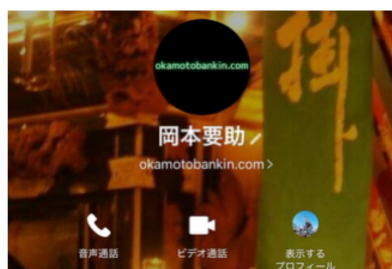
すると、岡本さんは静かに言った。

「奥井君しかおらん。奥井君に任せたい。」

その熱意に奥井は覚悟を決め、新部長兼・次世代会計に就任。

勇気を出して一步目を踏み出し、次世代用の口座を作った。

もう後戻りはできない。



第七章

数字の戦場 —— 三大天との戦い

2025 年 5 月、次世代研究会 in 三重の準備が本格化する。

「必ず黒字にする」「桑原さんの顔に泥は塗れない」

岡本さんのその言葉を胸に、戦いは“数字”の世界へと移る——。

奥井が岡本実行委員長から託された使命は、四日市市コンベンション事業推進補助金 100 万円の獲得。

柳本さんから中央会補助金の情報も入り、奥井の板金作業と補助金申請、出展協賛企業への請求書作り、会議事項書・議事録作成に奔走する日々が始まった。

容赦なく襲いかかる板金業務、部長業務、会計業務という業務の三大天が奥井の体力を日に日に奪う。

「これ寝る時間ぜんぜんあらへんな」そう思いながらも手足は止まらなかった。

奥井は現場に向かう、奥井は机に向かう、奥井はスマホに向かう、奥井は——。

全板、親会、岡本実行委員長と連絡を取り合い、四日市市役所や中央会事務所に直接出向きながら情報を集め、宿泊証明書を 100 名分揃えるなど、必要なときに、必要なことをやり続け、無事に補助金の獲得をやり遂げた。

一方その頃、岡本実行委員長と今原副部長は企業との戦場へ。

岡本実行委員長は 100 社以上に案内を送り、頭を下げ、想いを語った。

案内が企業に届いたその日から今原副部長のスマホが鳴り止む事は無かった。

今原副部長は企業から毎日届く申込書をドライブに投入し続け出展協賛リストを作り上げた。

気が付けば 26 社の出展企業、50 社以上の記念誌協賛を実現した。

それは、過去 44 回開催されたどの都道府県よりも多い数だった。

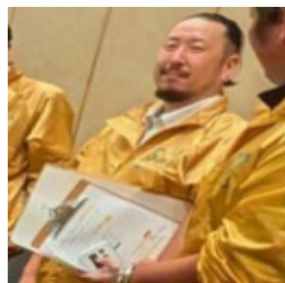
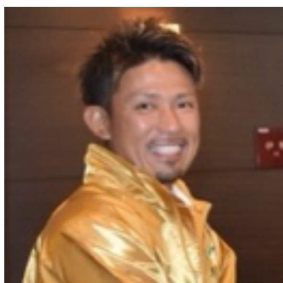
第 45 回次世代研究会 in 三重は歴史を塗り替える快挙を実現した。

一補助金と協賛金。

この二本の柱が、赤字の危機を打ち砕いた。

「……やったな」「これは、いけるぞ」

数字が、初めて味方になった瞬間だった。



第八章

総力戦、次世代研究会 in 三重 —— 合従軍、動く

【別紙②】

そして迎えた、次世代研究会 in 三重。

今原副部長が部員増強に力を入れてくれ、部員数は、21 人に増加した。

そのうち、15 人が次世代研究会に参加し参加率は 7 割を超えた。

数字と人を味方に付けた三重県板青年部にもう立ち止まる理由は無い。

全国レベルの猛者達が集結すると言われる全板協青年部合従軍を迎える準備は整った。

かつて —— 「人が集まらない」「やっても無駄や」

そう嘆いていた青年部は、もうそこには無かった。

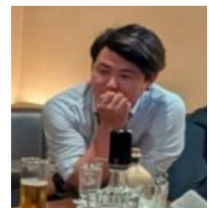
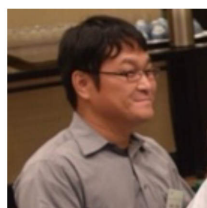
記念誌袋詰め、講演会司会、出展ブース設営、会場誘導、余興、懇親会、二次会。

誰一人として傍観者はいない。

全ての担当リーダーが建築板金史に名を刻む大將軍へと成長していた。

「俺、そっちやるわ」「ここ、任せてください」「次、何したらいいですか？」

一人ひとりが役割を持ち、一人ひとりが責任を果たし、一人ひとりが、確実に成長を遂げた。



第九章

証明 —— 復活は“人”だった

成功だった。胸を張って、そう言える。

だが本当の成果は、数字でも、評価でもない。

人が残ったこと、人が育ったこと、人が誇りを持ったこと。

【苦労を共にし、喜びと達成感を得る——。】

それこそが、令和の青年部が忘れていた何かの正体だった。

そして、

「やりたい」「やらなあかんねん」「きっと上手くいくわ」

という【熱意、決意、自信】が“人”を動かすという事実の証明だった。



最終章

未来へ —— 令和の三重県板青年部

2027 年 11 月、戦場を変え戦いはまだ続く。

三重県板青年部 50 周年式典。入り口には掘り出したタイムカプセルを飾る。

平成の時代を知る、歴代部長たちを迎えるその日、

胸を張り誇らしい姿で、言える。

「これが、令和の三重県板青年部です」と。

苦しかった日々も、人が集まらなかった夜も、すべてが、ここに繋がっている。

成長し、復活を遂げた今の三重県板青年部なら、必ず最高の姿を見せられる。

私は、そう確信しています。



作成者

三重県板青年部 部長 奥井 健

別紙①

三重が次世代研究会の開催地になるまでの経緯

第 45 回次世代研究会の開催地が三重県に決まったのは、今から 3 年前、愛媛での開催時にさかのぼる。

当時、全板出向役員として次世代事業を担当していた三重県板の桑原氏は、準備の大変さやチームワークの重要性を誰よりも理解していた。

その一方で、組合活動への参加者減少や「仕事が忙しいので本日の定例会は欠席します」といった青年部員からの声も多く、人が集まらない状況に、「本当に三重で開催できるのか」という不安を抱えており、一度は立候補を断ったという。

そんな中、桑原氏は信頼する二人の先輩に相談を持ちかけた。一人は当時全板出向役員であった横瀬氏。横瀬氏は「今の三重県板青年部がどうであれ、桑ちゃん自身はどうしたいのか。やりたいのか、やりたくないのか。それを考えた方がいい」と真っすぐな言葉を投げかけた。

もう一人は当時の愛知県板部長・森田氏である。森田氏は「愛知で開催することもできるが、それで本当にいいのか?」と問いかけた。この二人の言葉を受け、桑原氏の中で「三重で開催したい」という想いが明確になった。

その思いを当時の三重県板部長・岡本氏に伝えると、岡本氏は即座に「やりましょう! 何とかするはずですよ。三重県板青年部が変わるきっかけになるなら挑戦しましょう」と快諾。

さらに実行委員長も快く自ら引き受けたという。その姿に桑原氏は開催地の立候補を一度断った自分を恥じたという。

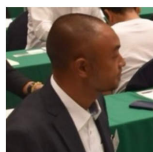
開催決定後、横瀬氏と森田氏は中部ブロック役員会で「中部から 100 人以上」「愛知から 20 人連れて行く」とそれぞれ力強く宣言し、地域全体の機運を高めた。

以降、岡本実行委員長を中心に、柳本氏や浜本氏、そして伊藤理事長をはじめとする三重県板執行部が一丸となって準備を進めていった。

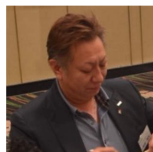
こうして、第 45 回次世代研究会の三重県開催は、桑原氏の「迷いから決意へ」という想いと、それを支えた先輩たち、そして岡本氏の「やりましょう!」という情熱によってスタートするのである。



桑原氏



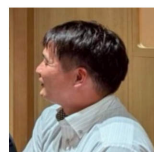
岡本実行委員長



横瀬氏



森田氏



柳本氏



伊藤理事長

別紙②

今回の事業を終えて『担当者たちの思い』



全板出向役員 桑原：今回の事業を通じて、私は多くの方々の支えの大切さを改めて実感しました。惜しみなく力を貸してくださった先輩方への感謝を胸に、今度は自分がその想いを後輩へとつなぎ、感謝の気持ちを行動で示していきたいと思います。



青年部部長兼会計 奥井：部長と会計の兼任は計算とパソコンが苦手な私にとって当初は想像以上に忙しく、銀行・市役所・現場・事務所を行ったり来たりしつつ、部長業務の事項書や議事録、報告書などの作成にも追われました。中でも補助金 100 万円の申請は何度も四日市市の観光交流課に行き、全板事務局さん・親会会計さん・岡本実行委員長と連携し、無事交付を受けることが出来ました。今は苦手分野のスキルも上がり仕事や部長業務にも役立っています。



実行委員長 岡本：私がまだ三重の部長を務めていた愛媛開催の頃、桑原さんから「次世代研究会を三重で開催したい」と相談を受けました。私は「やりましょう！」と即答。全板で活躍されている桑原さんの意思を受け入れるべきだと感じたからです。その後、秋田・北海道を視察し、三重ではチーム制で運営することに決め、「まずはチームワークからだ！」と会議を居酒屋で行うところから始めました。北海道開催終了後、全板から連絡をいただき準備が本格化するにつれ、三重開催の実感が湧いていきました。令和 7 年 3 月、奥井部長へバトンを渡し、私は実行委員長に専念。「桑原さんの顔に泥は塗れない！」という思いで、各リーダーと毎日のように電話で連絡を取りながら全体をまとめていきました。令和 7 年 4 月、企業や各組合などに出展・協賛案内を送りました。出展案内は 1 年前の全板大会（岡山）で名刺を渡して回った 50 社以上、協賛広告案内は 100 社以上に配布。結果的に出展企業 26 社、協賛企業 50 社を集めることができました。今回の開催で、「新幹線も空港もない三重県でも、300 人規模の大会は実現できる」という大きな証明になりました。支えてくれた各担当リーダーや三重県板青年部の仲間、出展・協賛企業の皆様、三重県板親会の皆様、全板青年部の皆様に心より感謝申し上げます。無事に務めを終え、ほっとした気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



一日目講師担当 柳本：三重で初開催となる次世代研究会ということで、せっかくなら地元の有名人、吉田沙保里さんにと依頼を検討したが、テーマとは方向が違う。

再び考えていた時「神宮に講演依頼できないかな」とふと思いついた。

令和 7 年は第 63 回神宮式年遷宮が始まる年で、タイミングもバッチリでこれしかない
と神宮の大工をしている友人に連絡したところ「広報課に問い合わせれば多分いける」
と返事を貰い神宮司庁へアポを取った。

しかし前例がないと一度は難色を示される。だが「造営部なら」と紹介を受け、再度ア
ポを取り交渉。過去の資料や板金新聞を送り内容を丁寧に伝えたところ「前例はないが
ぜひお受けしたい」と返事を頂けた。

その後、講師の近藤氏と打ち合わせを重ね、当日を迎えました。



懇親会出し物担当 藤原：三重県開催が決まり、会議を重ねていくうちに三重県板の青
年部員がワンチームになっていくのを実感でき、次世代研究会が終わった時には感動も
覚えました。

今回の貴重な経験を普段の生活や仕事にも活かしていきたいと思えたこと、そして次回
の滋賀県開催では、三重県の反省をいかしてさらに盛り上げてもらいたいと思います。
多くの仲間に出会うことができたことに、心から感謝いたします。

本当にありがとうございました。



記念誌担当 多湖：記念誌が無事完成できたのは、ご尽力いただいた組合員の皆様、温
かくご支援くださった出展者・協賛者の皆様、そして制作を支えてくださった出版社の
皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

初めての記念誌制作で無事完成させられるかという不安もありましたが、多くの方々の
ご協力により困難を乗り越えることができ、「難事もなんとかなる」という確信を得た
貴重な経験となりました。



会場誘導担当 倉野：会場全体を把握するのは大変で、当日には予想外の事も起こったりと、今振り返ると反省点も多々あります。
しかし、皆様のご協力のおかげで無事に進めることが出来たことに感謝しかありません。
チームワークの大切さを再確認出来ました。



出展協賛企業担当 今原：出展協賛の案内をお送りした翌日から、多くの反応をいただき、メーカー様からの電話対応に追われるほどでした。次々に届く返信 FAX の名簿作成が大変でした。今回の事業を通して、たくさんのメーカー様と新たなご縁を持てたこと、そして協賛 50 社・出展 26 社という多くのご協力をいただけたことに、心より感謝申し上げます。無事に事業を終えることができ、今は感謝の気持ちでいっぱいです。



接待担当 上岡：今回微力ながら、この次世代研究会 in 三重に携わらせて頂き、とても光栄でした。「皆さん、四日市はたのしめましたか？」私自身の役割は、皆さんに三重を楽しんでいただくというものでしたが、あまりお力添えできない部分が多く段取り不足を感じ多少なりとも後悔を募らせている次第です。
ですが三重県四日市市に集まって頂いた多くの皆様のおかげで、無事に次世代研究会 in 三重が終えれたことを嬉しく想っております。
今後とも、全国の板金組合青年部のますますの繁栄を祈念致しまして、私の『担当者たちの思い』とさせていただきます。ありがとうございました。